

(ノート)

佐賀県玄海海域におけるイカナゴ *Ammodytes personatus* の漁獲量の推移

寺田雅彦

(Note) Changing for catch of sand lance *Ammodytes personatus* Around Genkai Sea area, Saga prefecture

Masahiko TERADA

キーワード：イカナゴ, *Ammodytes personatus*, 長期変動, 農林水産統計

イカナゴ *Ammodytes personatus* はカナギと呼ばれ、シラス期は加工品の原料として、未成魚は釣餌料として利用される重要な水産資源である¹⁾。佐賀県玄海地区では、唐津湾周辺海域を中心として船曳網によって漁獲されていたが、長期にわたり漁獲実績がなく、現在漁業は行われていない。一方、イカナゴは漁獲対象物としてだけでなく、他の魚類の餌料として非常に重要な生物であり、漁獲量の動向を把握することは、海洋生態系の食物連鎖構造の変化を把握する上で重要であると考えられる。しかしながら、佐賀県玄海地区におけるイカナゴの漁獲量の動向について現在まで取りまとめがされていない。そこで、今回は公表されている統計データおよび佐賀県水産試験場が調査したデータを整理し、漁獲動向を把握した。

材料および方法

佐賀県玄海地区におけるイカナゴの漁獲量は、1902年から1940年までは佐賀県統計書のデータを、1954年から2011年は、佐賀農水産林統計のデータを用いた。また、統計データのない1940年から1953年のうち1942年から1949年までは佐賀県水産試験場が調査したデータを用いた。

統計データについては、唐津、伊万里の合計を玄海地区における漁獲量とした。単位が貫となっているデータについては、1貫 = 3.75kg として換算し、現在の表記(t)と比較できるようにした。また、佐賀県水産試験場の調査では、乾物の数量を調査し、それを4倍にした後、鮮魚販売されたものとして20%加算することにより漁獲量とした²⁾。

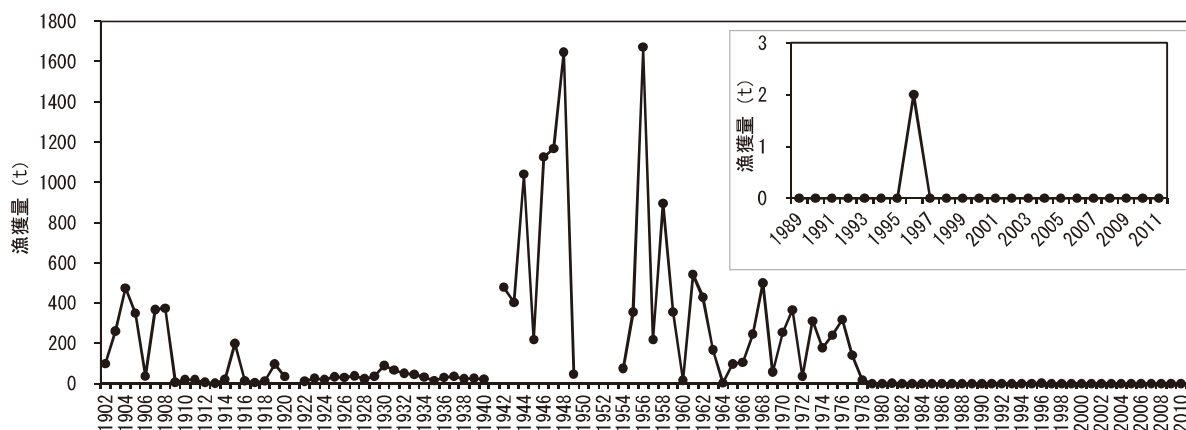


図1 佐賀県におけるイカナゴの漁獲量の推移

結 果

玄海地区におけるイカナゴの漁獲量は、1902年～1908年までは100～500トン程度が漁獲されていたが、1910年～40年までは、1915年の199トンを除き、ほとんど漁獲がなされず、30年近く不漁が続いた。その後、1940年代に入ると漁獲量は急増し、年による豊凶の差はあるものの、最大1,600トンの水揚げが記録され、1950年代まで漁獲量が高い時期が維持された。しかしながら、1960年代以降漁獲量は徐々に減少し、1978年以降は1996年に2トン漁獲されたのみであった。このように、本県玄海地区のイカナゴの漁獲量の推移を100年以上にわたってみると、年による変動はあるものの、おおむね30～40年の周期で好不漁を繰り返しているように見える。1946年（昭和21年度）の佐賀県水産試験場業務報告書²⁾によると、「10数年ぶりに本県海域への来遊が確認された」と記載されており、海洋環境や資源量の状態によっては、必ずしも本県海域で毎年漁獲されていたものではないことが推測される。

佐賀県と同一系群のイカナゴを利用している福岡県では、1954年以降の漁獲量の変化について考察¹⁾し、本県

と同様の漁獲量の変動がみられる中で、1970年代後半の漁獲量の急激な減少は乱獲が原因であること、禁漁により資源が回復傾向になっても再び漁獲過剰となれば資源の回復は望めないことから、一定量の親魚を確保するような資源管理を行う必要があることを報告している。

本県のイカナゴ漁獲量は、福岡県が報告した1954年以前にも漁獲がない状況が30年ほど続き、1940年代に入って突如回復していることが確認された。この要因については不明であるが、イカナゴ資源の発生状況に周期性があるとすれば、現在が続いている不漁も、1940年代のように急激に回復する可能性も考えられる。このことから、イカナゴ資源を有効的に利用するためには、福岡県とも連携しながら資源状況の把握や資源管理のあり方について検討を進めることが重要である。

文 献

- 1) 秋元 聡・伊藤輝昭・吉田幹英・中川 清・金澤孝弘 (2002)：筑前海域におけるイカナゴ漁業の変遷と資源評価，福岡水技七研報，**12**，19-27.
- 2) 佐賀県水産試験場業務報告書 (1946)：イカナゴ生態調査.